

# 魚梁瀬 東の川稜 編線



魚梁瀬は工佐十右衛門の随一河原との国境にハナハチの新設設け、足野二人の常駐。中川と東川の分水嶺、に番市があり番所の大杉がみつ。村人がこの近くで山姥に感わられ道に迷ふ以前、この杉を「お化け杉」と呼ぶようになった。

木地師の墓  
工小40の川石を積み重ねて平地に石塔を立てて墓と作つてある。墓を守るように背後に天籙杉を植え替えている。

番所では、盗伐などの警備や管理を行っていた。(元禄年間(1688~1703))

東川線の敷設は1930年(55年)、1962年(837年)に徹底。

杯鉄はガタンゴトンとましむ音を立ててゆく魚梁瀬をサマシ活載し治線に住む人々の生活の足として活躍していた。

ゴシアアウ 濃い油いカモチクアキアキなく、とろとろで絶妙の風味。金漆(コンゼツ)の木の別名もあり、樹脂を精製して塗料に使われ、一種のウルクとされる。

深い深い魚梁瀬の森の奥にぽつんと立っている大木がある。その横一な幹にざわわると狐高の迫力と力強さと同じ孤独という哀しみが伝れ、ぎにような気がした。

もみいろと若草色の春がきて、つらつかな日々が、楽しく過ぎてゆく(四季の色)

東洋のルソー・自由民権の思想家で学者中江兆民(明治21年(1888)夏、仙学塾の門弟山崎保太郎(近江守) (初代馬路村長)に誘われて、海部の柳川より) 宿田丸も超えて、シロ山(紫木山?)にある保太郎の父、唯次が所有する本ノリ小屋に泊まり魚梁瀬へ着いた。

この旅は随筆「阿比留」に記されている。魚大好き。酒も大好き。お茶も、地元の料理も大好き。西遊記の中、途中マニラに泊り、雨に降られ官憲に尾行され、セシとどりの川に魚梁瀬と大杉を毎日毎日食べてお茶を飲んだという。政治界に鋭い批判を連ねながら、大杉が人間にどう中江兆民の墓が、何か。

参考文献  
・馬路村の巨樹、名木  
・高知新聞記事

若い頃の  
中江兆民  
魚梁瀬温泉に山中の  
人里離れた  
山崎保太郎  
と記した石の碑がある。

仙現丸 10/8.5m  
昔、山頂より500m以下で音階に水田があつたことから名付けられたという。

